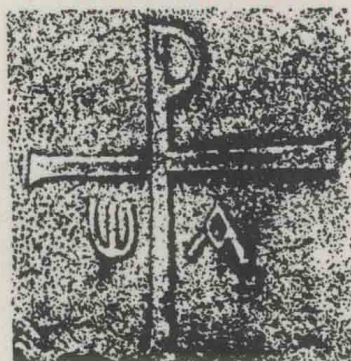


ブルデンティウス 家入敏光訳

日々の賛歌・靈魂をめぐる戦い

キリスト教古典叢書 7



上智大学神学部編
P.ネメシエギ責任編集
創 文 社 刊

日々の賛歌・靈魂をめぐる戦い

プルデンティウス
家人敏光訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

日々の賛歌・靈魂をめぐる戦い〔キリスト教古典叢書 7〕

1967年4月30日 第1刷発行

ISBN4-423-39207-0

1993年5月30日 第2刷発行

編 集 者	上智大学神学部
編集責任者	P・ネメシエギ
訳 者	家 入 敏 光
発 行 者	久 保 井 浩 俊

定価 3605 円 (本体 3500円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

目次

カテメリノン「日々の賛歌」

序論		七
内容		八
意義		二〇
本文		
序（フルデンティウスの詩全体の）		二五
第一歌 鶏鳴時の賛歌		二九
第二歌 早朝の賛歌		三六
第三歌 食前の賛歌		四七
第四歌 食後の賛歌		五三
第五歌 点燈の賛歌		五七
第六歌 就寝前の賛歌		六五
第七歌 断食の賛歌		六七
第八歌 断食後の賛歌		七四
第九歌 毎時の賛歌		八二

第十歌 死者埋葬の賛歌	一三一
第十一歌 ご降誕の賛歌	一四三
第十二歌 ご公現の賛歌	一五五
注	一七三

プシコマキア「靈魂をめぐる戦い」

序論	一九
内容	二〇〇
序	二〇〇
本文梗概	二〇一
本文	
序	二一一
一 信仰と偶像崇拜の戦い	二二七
二 純潔と情欲の戦い	二三八
三 忍耐と憤怒の戦い	二三三
四 謙遜と傲慢の戦い	二三七
五 節制と快楽の戦い	二四六
六 慈善と食欲の戦い	二四五

七 和合と不和との戦い	二五八
注(本文中*印を附したものに行 数を示して注をつけてある)	二七五
解説	
ブルデンティウスの生涯	二九一
” 著作	二九五
” 著作年代	二九六
” テキスト	三〇三
むすび	三〇五

カテメリノン「日々の賛歌」

序 論

「日々の賛歌」Cathemerion は「栄光の冠」Periephanon とともにギリシア語の標題をつけた抒情詩で、われらがここに取り扱う「日々の賛歌」は、キリスト教徒の祈禱書・黙想書とも言える賛歌を集めたもので、平凡な日々の生活の中でわれらがわれら人間の魂の不死、罪惡の起源を考察しながら、どのようにして天なる神、キリストへ近づくべきかの基本問題が取り扱われている。しかしこのような賛歌は、すでにポアティエの司教聖ヒラリウス、とりわけ賛歌の偉大な創始者なるミラノの司教聖アンブロシウスの復活・公現・クリスマス・朝課・ペトロ・パウロ・アグネスその他の賛歌に見られるもので、これらは民衆に歌われるように作成された賛歌であるが、ブルデンティウスはこの種の賛歌をもっとつけ加え、且つこれ以前のものよりも長いものにして、民衆に歌われるよりは読まれるような賛歌にしたのである。すなわちこれまで二〇〇五〇行しかなかったのを八〇〇二〇〇行にし、古典詩詩型を自由に駆使して、活氣と優雅に満ちた抒情的な種々の賛歌を加えて、典礼的・文学的にしたことの意味があり、キリスト教古代の最大の詩人と言われるにふさわしい。かれは心・言葉・行いをもって詩をささげようとしている。彼にとっては賛歌が聖化のための手段であり、生命ある日の徳の修練、死に際しての希望・ささげも

のであった。

内 容

第一歌

鶏が鳴いて夜明けを告げると、キリスト教徒にとっては寢床を片づける時間である。鶏鳴は最後の審判の象徴である（一一一二）。鶏鳴は精神的に眠っている者を目覚ます神の声の象徴であり、また眠りは永遠の死の象徴である（一三—三六）。誘惑して罪人にしようと夜を利用する悪魔は鶏鳴に驚く、この時刻にキリストは世を審判するために現われるだろうから（三七—四八）。使徒聖ペトロは夜に罪を犯し、鶏鳴でかれの心は恩寵に目覚めた（四九—六四）。キリストはこの時刻に復活した。キリストは闇と死とに打ち勝った真の光・生命である（六五—七二）、われらもまたキリストのように罪の闇に勝ち、地獄の幻想・地上の財宝への渴望を絶たねばならぬ。神なき生活は生活ではなく、せいぜい夢である。われらはキリストが恩寵の光を与えるようキリストに呼びかけよう（七三—一〇〇）。ここではまた天上の永遠の日、キリストの十字架刑の時の闇と復活時の朝とが想起される。一一八、八一—八四、九七—一〇〇が聖務日禱の賛課に取り入れられている。

第二歌

ここには第一歌におけると同じ象徴が見られる。詩句は字義的でもあり、またより超越的・象徴的な意味をも有している。夜・闇・混乱は罪の似姿であり、これに反して光はキリストの真の象徴である。物理的な闇は日光に当ると消失し、物体は色彩をうる。道徳的な闇なる罪は、被造物と人間とが意義・価値を受けている主から遠ざかる。これは善と悪、光と闇との間の永遠の闘争であり、われわれは日の出を見て審判の日に想いをはせる（一一三二）。各人は貴賤の別なく真面目に毎日の仕事に出かける。人は昼間に何の益にもならぬことをなすことをはばかる（三三—四四）。キリスト教徒の、とりわけキリスト教詩人の任務はキリストを認め、敬虔と悔悛の心でことばには表わさないであるいはことばに表わしての祈りと歌とをもってキリストに奉仕することである（四五—五六）。光の王なるキリストがキリスト教徒の感覚を調べ、闇のすべての汚れを清めるようにとの心からの祈りが唱えられている（五七—七二）。ヤコブと天使との戦いについての寓意的な解釈。人間の魂の戦い、とりわけ邪欲を断つ象徴（七三—九二）。罪の過去を嘆き、これから新たに光に仕えて清らかな生活をすることを熱心に求めている（九三—一〇四）。太陽は輝く顔を持ち、その顔はキリストの顔を表わす。太陽のようにすべてを見るキリストは、常にわれらのすべての行動を審判しているのだ（一一〇五—一二二）。一一八、四九—五二、五七—六〇が聖

務日禱の水曜日の賛課に入れられている。

第三歌

十字架をにない、光の施し主なるキリストへの美しい祈りであり、キリスト教徒の素朴な饗宴の描写である。異教徒の食事の風習とキリスト教徒の食事とは異なっている。われらの食事はキリストの恵みで調味され、信仰の甘露が混ぜられている。義者は甘露によって生きる（一二三五）。どのように種々の食物がとられるかが以下に叙述されている。神は万物を人間に従わせた（三六一五五）。キリスト教徒の食事は肉料理ではなく、無垢の食事で、野菜・果実・乳・蜂蜜・チーズからなっている（五六―八〇）。自分の姿に似せて人間を創造した神に対して、われらは生命と声のすべてをあげて感謝の賛美を捧げる、それはこの詩人の切なる願いでもある（八一―九五）。創造の歴史、人祖が住んでいた樂園での生活、エワと蛇の誘惑、罪への墮落（九六一―三五）。神なるキリストは受肉し、悪に打ち勝った。第一のアダムは不従順のゆえに死んだが、第二のアダムであるキリストは従順によって死からよみがえった（一三六一―七〇）。飲食の不節制は第一のアダムのように死をもたらすから節度を守り、肉身の復活と不死とを信頼をもって希望すべきである（一七二―二〇五）。

第四歌

ここに食後の感謝の賛美がはじまる。賛美の歌は父・子・聖霊なる三位一体の神に向けられる。聖霊は清らかな心に宿るが、放蕩・銘酊・邪惡な思いによって追い出される（一―三〇）。敬虔な者でも肉体を養わねばならぬが、それはよりよく神の精神を受けることができるように簡單で節度ある食事をとるのである。毎日のこの絶え間なき高揚、天上の光による日常生活の聖化はブルデンティウスの詩人的使命に属するように思われる（三一―三六）。ダニエルはバビロニアの偶像崇拜を非難して獅子の洞窟に入れられる。ダニエルの食物はハバククがもって来た（三七―七二）。ダニエルは忠実なキリスト教徒の象徴、僭主は世の象徴、獅子は吠え廻り齒をむき出す惡魔の象徴である。ハバククがダニエルに与えた食物は、預言者の聖なることばの象徴であり、またさらにはキリスト教上の秘跡的な食事なる聖体の象徴である。三位一体の教えが詩の始めと結びをなしている（七三―一〇二）。

第五歌

太陽は第二歌におけると同じくキリストの象徴である。ホラティウスは皇帝を太陽として描いているが、ブルデンティウスのは古典的であるのみならず、聖書的・護教的な太陽である（二―四）。自然的なものは超自然へ、肉体的なものは本性を失わずに精神的に高揚される。火打石の火

花から来世の明るい光の發生の美しい描写（九―二八）。モーセは燃えるいばらの茂みの中に神を拝し、また荒野をさ迷っているとき、火柱の導きでイスラエルの民をエジプト人の攻撃から救った。火柱は教父たちからキリストの象徴とされていた（二九―四四）。イスラエルの紅海渡りのみによく知られた描写。エジプト人は不信仰な王に仕える恐るべき敵で、口を開けた竜の旗をつけた軍勢であるが、神は忠信なるイスラエルの選民を導かれる（四五―一〇四）。約束の地への入国は神がキリスト信者に天上の国へ導かれることを想起させる。淨福者のために定められたこの花咲き香る義人の国は天国を表わしている（一〇五―一二四）。イスラエル人がエジプト人からの奴隸の軛を脱することは、死の国の闇でのキリストの下山に比較される。これは復活祭前夜の思想である（一二五―一三六）。信徒が集まっている会堂での光の照明は、復活祭前夜の徹夜 *Veil* *pachalis* のろうそくの光 *Incernarium* である。プルデンティウスが光の御父にこのふさわしいさげものを献上するとき、かれの抒情的な賛歌はこのうえもない感動に満ちている。キリストは聖なる御父のひとり子であり、われらの目に見える光榮であり、われらの主であるとともに、永遠の御父とともに聖霊を息吹き出す神である。神にささげた光の詩人プルデンティウスの作品は心からの琵琶に合わせた歌、華麗な頌歌、典礼的な崇高な賛歌である（一三七―一六四）。

第六歌

聖なる三位一体への呼びかけ（一一八）。神の摂理に従って身体の鋭気を養う休息の必要（九二四）。睡眠中の魂の活動についての面白い描写（二五—五六）。ヨゼフはファラオの二人の臣下の夢を解釈してやる。酒酌人（義者）は王の寵遇をうけ、パン屋（不義者）は処刑され、鳥の餌食にされる。またヨゼフはファラオの夢を解釈して来たるべき飢饉を警告する（五七—七二）。ヨハネ黙示録について、過越祭にほふられた小羊はキリストの死の象徴で、その血を戸に塗ったように、復活祭前夜に新信者の額に塗油してキリストのようによみがえるのである（七三—一二二）。就寝前にキリスト教徒は額と胸に十字架のしるしをして悪魔を遠ざける（一三—一三六）。真ちゅうの蛇はキリストの十字架の象徴である。モーセが砂漠で真ちゅうの蛇をあげてイスラエルの民を救ったように、キリストも磔刑にされて人類に救霊をもたらした（一三七—一四八）。疲れて眠りにつく時も愛慕者キリストへ心向けよう（二四九—二五二）。

第七歌

キリストは質素な饗宴の王として呼びかけられる。キリスト教徒の悔悛の道は断食によってよく表わされる。キリストは快樂なしに懐胎された禁欲の果実である（一一五）。肉体と魂との悪は断食によって退散させられる。放蕩は罪と精神的な痴鈍とを生む（六一—二五）。次に聖書によって断食の五つの例が示される。（一）エリアは砂漠で断食し、後にかれは代償に火のような馬に引かれ

た車で天に運ばれた(二六―三五)。(二)モーセは四十日間断食し、その間の食物は夜の祈禱時にかれが流した涙であった。ついにモーセは燃える茨の茂みの中に神を拝し、その声を聞いた(三六―四五)。(三)砂漠に住んでも毛皮の衣を着、いなごと蜂蜜しか食べなかった洗者ヨハネはキリストの到来を準備し、新しい救いを唱道し、ヨルダン河の水で罪を洗い清めた(四六―八〇)。ヨナの時代のニネベ人の断食。ヨナはニネベに行くよう神の命を受けたが、それを逃れようとタルシスへ航行するが、途中嵐に遭い、海に投げ込まれ、怪獣に呑み込まれ、後にニネベに行き、神の怒りを告げた。全市が痛悔断食して救いをえた。ヨナはキリストの復活の象徴である(八一―七五)。(四)われらの主キリストは四十日間断食し、悪魔の誘惑を受けたがそれを退けた(一七六―一九五)。断食への勧誘。われらキリスト教徒は各個ばらばらにではなく、手に手を取りあい一体となって諸聖者・英雄の手本にならない、節度ある生活によってより高い完徳の道を歩まねばならぬ(一九六―二一〇)。

第八歌

人となって、人生の重荷を自分の身に引き受けたキリストは信徒の模範として呼びかけられる(一一八)。この賛歌は食事の時間(午後三時頃に断食は終わった)のために定められたもの。福音の精神にのっとって断食する際に、外面的な態度に注意すべきこと(一七一―三二)、失われた小羊